

戸である。板の交差部には切り込みを設けて組み合わせている。井戸枠は、全部で16枚の横板（幅10～20cm、長さ180cm前後、厚み3～5cmのヒノキの板）で構成されており、切り込みの状況から、北面と南面の最下段を設置したのち、東西の最下段を積み、順に二段目、三段目と積み上げていく構造である。南面と西面の横板はチョウナ痕が確認できる。井戸内部の底からは平城Ⅲ期の土師器杯、須恵器杯、木簡、斎串、和銅開珎が出土している。

本井戸については検出された周囲に同時期の遺構が確認できないことから、比較的広い範囲に単独で造られたものと推定されている〔合田2018〕⁽³⁾。

付札木簡

井戸417HWからは付札木簡（長さ13cm、幅2.3cm、厚さ0.3cm）が1点出土しており、記載されていた墨書は「□□国□□郡→・方（カ）□郷日下部□□→」⁽⁴⁾と判読されている〔高畑町第5次発掘調査団2008〕。裏面の「方□郷」については、西宮市の存在する武庫郡とその近在にはみられない地名である。ただし、人名と考えられる「日下部」については、『続日本紀』などに記載がみられ⁽⁵⁾、武庫郡に関係の深い在地の豪族として日下部氏との関連が想定できることから西宮地域史にとっては極めて重要な資料となっている。ただし、「方□郷」の地名の問題点や、荷物の送り主と推定できる「日下部」が記された付札木簡が送り先でなく、送り元のそれも井戸底から出土したという事実も踏まえて、慎重に検討する必要がある資料である。

3 高畑町遺跡出土木製品の意義

高畑町遺跡は、第5次発掘調査において、地方の一般的な集落には似つかわしくない規模やつくりの奈良時代の井戸や、在地の豪族「日下部」氏を想定させるような木簡が確認された。第5次発掘調査では確認できなかった同時期の建物遺構についても平成28年度（2016）に高畑町遺跡の南に隣接する津門大塚町遺跡において、奈良時代の大型建物跡が確認されたことで、「両遺跡が一体のものとして評価されるべき遺跡」として、津門遺跡群が想定されている〔合田2018〕。平成28・29年度（2016・2017）に

行った高畑町遺跡第9次発掘調査で古墳時代の堅杵や鍬、泥除、田下駄、横槌、編台、紡錘車、糸巻軸、木錘、矢形、作業台、扉、壁板材などが一括して出土している〔森下・田之上2017、森下2018〕。

これらのことから、高畑町遺跡出土木製品の意義は、①第9次調査の出土木製品からは、「高畑町遺跡の居住者として、律令制下で里長クラスの官僚に生長した豪族の先祖を想定」〔上原2018〕でき、②第5次調査の出土木製品からは、武庫郡大領である日下部氏との関連の可能性が想定できる点にある。

合田氏により推定された高畑町遺跡を核とする「津門遺跡群」の出土資料の個々の検討を慎重に行うことで、従前よりよくわからなかった西宮地域の古代の姿の一端が明らかになる可能性があり、今後の調査研究が望まれる。

註

- (1) 紅野芳雄は、大正6年（1917）から昭和13年（1938）まで、西宮・近畿地方一帯を踏査し、遺跡の記録を残した。
- (2) 発掘調査からの予察としながら、合田茂伸氏により「津門遺跡群は「日下部」木簡が代表する古代郡衙遺跡であり、「西宮町遺跡群」は西宮戎神社を戴いて平安時代末に出現する中世商業都市遺跡と考える。」との推定がなされている〔合田2018〕。
- (3) 同様の事例として、滋賀県信楽市の北黄瀬遺跡第2次調査出土の井戸が指摘されている〔合田2018〕。
- (4) 奈文研051形式
- (5) 『続日本紀』（天平神護二年（766）九月壬申条）「撰津国武庫郡大領従六位上日下部宿禰清方献銭百万正相樽一千枚。授外従五位外」

参考文献

- 上原真人、2018年、「高畑町遺跡出土の木器」、『新発見・西宮の地下に眠る古代遺跡』、大手前大学史学研究所・西宮市教育委員会合同シンポジウム
- 合田茂伸、2018年、「発掘調査から構成する西宮地域史」、『新発見・西宮の地下に眠る古代遺跡』、大手前大学史学研究所・西宮市教育委員会合同シンポジウム
- 高畑町遺跡第5次発掘調査団、2008年、『高畑町遺跡発掘調査報告書』
- 西宮市、2022年、『新西宮の文化財（改訂版）』
- 森下真企・田之上裕子、2017年、「兵庫県西宮市高畑町遺跡発掘調査速報」、『古代学研究』第213号
- 森下真企、「古墳時代集落としての高畑町遺跡」、『新発見・西宮の地下に眠る古代遺跡』、大手前大学史学研究所・西宮市教育委員会合同シンポジウム

西宮市立郷土資料館学芸員